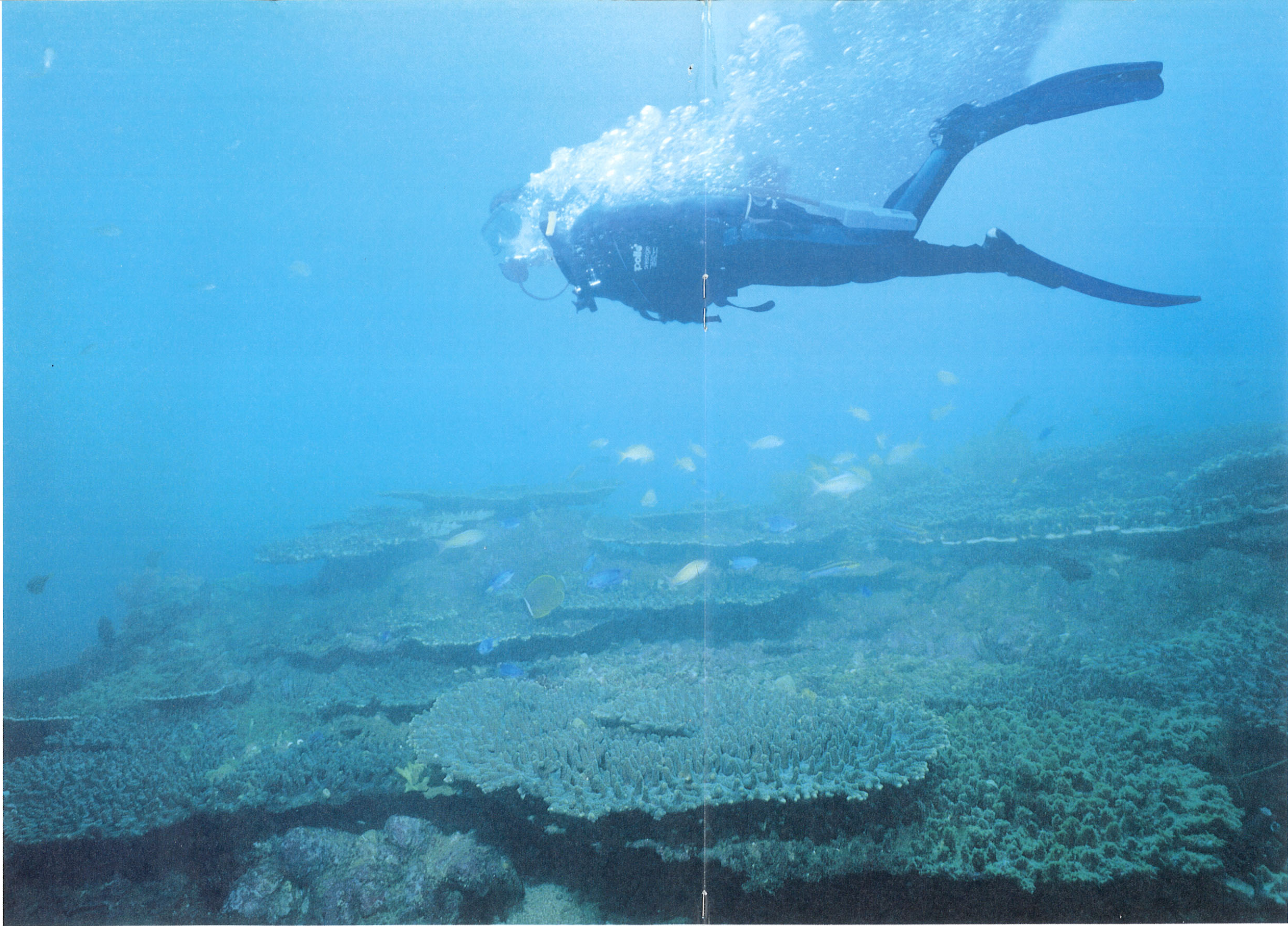


日本においてサンゴの群生する北限とされる牛深の海。中でも牛深港の西南に干口の海上に浮かぶ龍仙島北西部にテーブルサンゴの群生がみられる。



青く透き通る海に潜っては魚突きに興じる少年がいた——。少年は青年となり、その町を巣立っていった。その当時は、サンゴなど目にも止まらなかった。

都会での生活が続く。しかし、海への思いは募る。再び青年は町へ、そして青い海へと帰ってきた。

「海に飢えていたんでしようね」
少年時代の事を水中カメラに代えて、再び海に潜り始めた。

この海がサンゴの群生する北限だと、青年は帰ってから知った。サンゴの生息条件には、年間を通して平均十八度以上の水温と高い透明度を保つ海が必要だ。その透明度は、水

温の低い秋から冬にかけて高まっていく。サンゴの美しさを町の人々に知らせたい、その一心で海に潜り、多くの写真を撮った。

「海の中は沈黙の世界ですよ」
呼吸の泡の音と、水の弾ける音が響くだけで、あとは何も聞こえない。

横幅四十〜五十センチ、全長二百センチにも及ぶテーブルサンゴが群生するポイントがある。四年前、青年は漁師さんからその場所を教えてもらった。テーブルサンゴは見た目こそ派手さはないが、魅力的だ。プランクトンを餌にする小魚が集まり、その小魚を餌とする大魚も集まる。大魚から身を隠すため、磁石に吸い寄せられるかのようにサツとサンゴの下に身を寄せる小魚の群れ。まさにシャッターチャンスの一瞬だ。

去年の台風でテーブルサンゴの大半を波がさらっていった。サンゴの成長は一年間に五〜十センチ。

「残念だけど、でも、この海が美しい限り大丈夫」

と、青年は微笑んだ。
美しいサンゴの群生は、ゆっくりと、ゆっくと時間をかけて、きっとこの海に戻ってくる。

撮影／富川光

南海の海の舞踏会